

地域課題の
解決に向けた
取組み事例集

住みたい・住み続けたい まちづくり大百科



あけてびっく
地域のアイデア



令和4年(2022年)3月

茨木市

目次

はじめに..... 1

活動事例 3

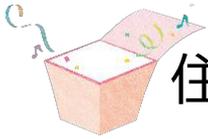
【加入促進・組織活性化に関する事例】		
■庄二自治会	災害用リュックサックの購入など 持続可能な自治会運営に向けた取組み！	3
■春日小学校区地域協議会	心をつなぐお揃いTシャツ	5
■大池地区地域活動協議会	地域全体で自治会について考える「自治会長会」の発足	7
■グレースィ茨木プリマージュ 自治会	住民ニーズに対応した活動と情報発信 機関誌「G.I.P.」と「KMD」の創設	9
■ジオグランデ東中条さくら 通り自治会	マンション住民のつながりを深める！ 災害時の「トラブルメモ」と「簡易トイレ」の配布	11
■上野第二自治会	自治会役員の負担を軽減した「高齢化対策プロジェクト」	13
【親睦・ふれあい活動に関する事例】		
■蔵垣内自治会	自治会主催「誰もが参加できる地域行事」	15
■泉原自治会	地区に根付く「太鼓巡行」	17
【防犯・防災に関する事例】		
■西河原自治会	一時避難場所MAPの作成と防災倉庫の設置	19
■三島地区連合自治会	高齢者中心の自主防災会からの脱却へ 若者に想いをつなぐ防災教室	21
■中村町自治会	空き巣対策！地域オリジナル「防犯ポスター」	23
■安威北部自治会	黄色いタオルを用いた安否確認訓練と 独自性溢れる防災活動	25
■沢池地区・西地区 自治会連合会	地域を守る安心パトロール隊の取組み	27
■玉島地区連合自治会	玉島地域に特化した防災情報を発信！ ハザードマップ概要版の作成	29
【福祉に関する事例】		
■豊川地区まちづくり協議会	近所で買い物がしたい！「移動スーパー」の誘致成功	31
【環境美化に関する事例】		
■郡五丁目西自治会	子どもと大人で楽しむ「犬のフン撲滅大作戦」	33

編集後記 35

■イバマチ編集会議の取組み経過 35

■イバマチ編集会議活動写真 36

■参加学生のコメント集 37



住みたい・住み続けたい まちづくりに向けて

茨木市には、33の地区があり、それぞれにおいて、ふるさと祭りや体育祭、文化展等の地域行事が開催され、地域のつながりを育むとともに、地縁による自治会をはじめ、地域の各テーマ型組織や各種団体（以下、「各地域組織」という。）による地域課題の解決に向けた取組みが実践されています。しかしながら、近年、少子高齢化による人口構造の変化、人々の価値観やライフスタイルの多様化に伴い、地域の助け合いや地域の課題解決が日常的に行われた「向こう三軒両隣」といった隣近所の関係が希薄になり、地域のつながりや地域活動などを従来どおりに行うことは難しくなりつつあります。

そのような中ではありますが、災害時における助け合いや地域の子どもの見守り活動などの大切さ、年齢を重ねても人との関わりを持ちながら、楽しく過ごしていきたいという思いは、今の時代においても変わらないものであると感じています。そしてその礎となるのは、お住まいの地域のつながりではないでしょうか。

今回、皆さまのお住まいの地域、また、近隣の地域で行われている地域活動を知る機会の一つとして、市内の大学と連携した「イバマチ編集会議」※を開催し、学生による各地域組織への取材を通し、地域の工夫した取組みをまとめた事例集を作成しました。

本事例集では、地域の課題解決に向けた創意工夫した取組みについて「知って・学んで・つながる」ことを目的に、その取組み事例を紹介するとともに、担い手の思いや、取材した学生の感想などを掲載しております。各地域組織において、共有していただくなど、今後の地域活動の一助となれば幸いです。

なお、本冊子に掲載いたしました事例の他にも、各地域で取り組まれている事例がございましたら、担当課まで情報をご提供ください。引き続き、さらなる地域活動の活性化に向け、地域の取組み事例の発信に努めてまいります。

令和4年3月

茨木市 市民文化部 市民協働推進課

<イバマチ編集会議とは>

地域への取材内容の振り返りや、事例集のレイアウト・デザインの検討、原稿の校正などを行う、事例集の完成に向けて学生が主体となって取り組む会議が「イバマチ編集会議」です。

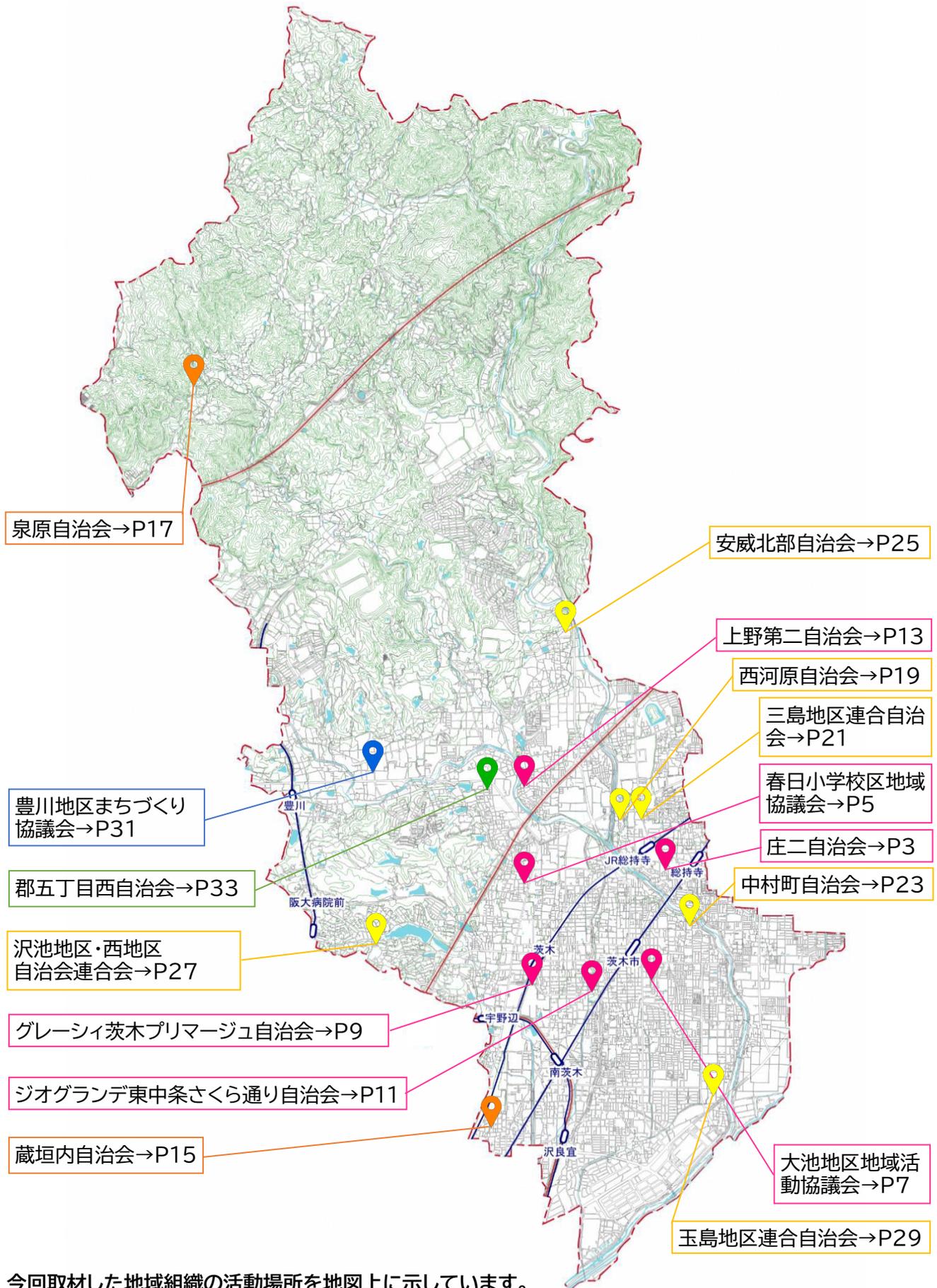
茨木市が大学包括連携協定を締結している大学に通う学生を対象にメンバーを募集し、令和3年度は、追手門学院大学と立命館大学の学生19名が活動に参加しました。

「住みたい・住み続けたいまちづくり大百科」という事例集のタイトルも、編集会議に参加する学生からの提案を踏まえ、決定したものです。



※「イバマチ編集会議」の取組みについては、本事例集のP.35～38に掲載しております。

今回取材した地域組織の活動場所



今回取材した地域組織の活動場所を地図上に示しています。

庄二自治会

災害用リュックサックの購入など 持続可能な自治会運営に向けた取組み！

～地域のつながりを感じる活動とその継続に向けて～

阪急総持寺駅からほど近い、庄二丁目を拠点に活動する庄二自治会。庄二自治会では、自治会費で防災グッズを購入し全世帯に配布するなど、自治会費の使い方を工夫しています。

自治会に入っていて良かった！「防災グッズ」の全世帯配布



配布したリュックサック

茨木市内だけでなく、全国各地で自治会の加入率の低下が課題となっています。庄二自治会では、自治会に入っていて良かったと思ってもらえるように、工夫した取組みを行っています。

その1つとして、防災グッズ一式が入ったリュックサックと災害用の簡易トイレを購入し、自治会加入世帯に配布しています。

7年前に、自治会の積立金の使い方について、自治会で話し合う中で、災害時に有効活用したいという意見がありました。しかし、災害が起こってからでは、有効活用するのは難しいという意見もあり、災害への日頃の備えの大切さを考えてもらいたいという意味も込めて、防災グッズの入ったリュックサックと簡易トイレを会員に配布し、災害に備えてもらうようにしました。

リュックサックは、長期間保管することも見据えて、食品の入っていない防災用備品中心のものを選びました。

7年前のリュックサック配布以降に自治会に加入した世帯にも、2、3年に一度まとめてリュックサックを購入し、配布しています。

自治会加入世帯数を減少させない！その秘訣とは？

自治会加入世帯が減少する理由は、加入世帯の転居と、新たに引っ越してきた世帯が自治会に加入しないことなどが理由として挙げられます。

POINT

そこで、「自治会に入ってもらうために、メリットを感じてもらえるような工夫をしている。引っ越してきた人には、自治会紹介オリジナルシートと、茨木市が作成している自治会加入促進チラシを配布した上で、会長・副会長が直接訪問して自治会に入るメリットを伝えている。」と関野会長は話します。

自治会の活動を楽しく意義あるものとするために、防災グッズの全世帯配布のほかにも、工夫した取組みを行っています。

その一つが自治会加入世帯へのゴミ袋の配布です。地域の美化意識の向上を図るため、12年ほど前から、自治会加入世帯に対して、45リットル30枚入りのゴミ袋を毎年配布しています。

また、ふるさと祭りや、自治会で実施する清掃活動など、自治会として人手が必要な時に、活動に参加・協力してくれた方には「ご苦労さん賃」として、商品券を渡しています。

さらに、自治会で庄公園の清掃を年間8回実施しており、参加してくれた方には10枚入りのごみ袋、子どもにはお菓子を配っています。

清掃活動は、地域のコミュニケーションの場となっており、高齢の方にも「掃除はしなくていいので出てきてください。」と呼びかけ、多くの地域住民が活動に参加しています。

■今後やってみたいこと～自治会活動の継続に向けて～

防災について考えた時に、庄栄地区には自主防災組織がありません。しかし、担い手不足により弱体化している組織も多いので、「新しく作るのではなく、老人会、福祉委員会を主体として、高齢者向けの防災対策を行っていきたい。」と、関野会長は話してくれました。

また、自治会の加入促進に向けて、今後も自治会に入るメリットを伝えていきたいとのことでした。

今後は、持続可能な自治会運営に向けて、自治会の加入世帯数を維持していくことも重要ですが、地域活動に携わる後継者を育成していきたいとの思いもあります。「現在、自治会活動で中心となって取り組んでくれている人は、他の組織の役員を兼ねている人も多く、負担となっている。高齢化もしてきているので、役割を分担していかないと担い手が不足していくかもしれない。」と、関野会長は話します。続けて、「若い方にも積極的に仕事を任せて、後継者を育成していきたい、その際も、できるだけ負担を感じないよう自治会役員を中心にバックアップしていきたい。」と、語ってくれました。

現在、コロナ禍の影響で自治会の会議や行事が出来ないため、自治会費を集めていない地域もあります。しかし、「一度自治会費の徴収をやめてしまうと、再開することが難しくなる。活動ができない状況でも自治会費を徴収し、その支払った金額と同じくらいのサービスを還元することが大切だ。」と、関野会長は教えてくれました。

■取材を受けた地域の方から一言

庄二自治会 関野会長

若い方々（学生さん・市職員）と地域活動を話し合えたことを喜んでいます。地域の多くの人たちに支えられて続けられていることで、自治会費も効果的に活用させて頂いています。更なる近所付き合いを深めていきたいです。これもSDGsですね。

■取材をした学生から一言

立命館大学総合心理学部 加藤さん

自治会費を加入世帯にしっかりと還元されているところが素晴らしいと思いました。様々な事に取り組んでいるというだけではなく、この地域への愛や住んでいる方たちへの愛が感じられました。

追手門学院大学地域創造学部 堀江さん

どのようにして加入世帯に喜んでもらおうかと日々考えられているということが伝わりました。会長の思いがあるからこそ様々な取組みを行い、自治会を盛り上げられているのだと感じました。

立命館大学政策科学部 山田さん

自治会に入るメリットは何かを考えて、活動を行っていることが魅力的で、災害用リュックサックの配布は、災害時に身を守るために役に立つもので重要だと思いました。これらの活動が自治会の加入率の向上につながると感じました。



取材後の集合写真

春日小学校区地域協議会

心をつなぐお揃いTシャツ

～『TEAM KASUGA』で地域を盛り上げる～

「TEAM KASUGA」と書かれた鮮やかな赤色のTシャツ。これは春日小学校区地域協議会が作成した通称「春日Tシャツ」です。春日小学校区地域協議会では、地域活動に携わる方の一体感を高めることを目的に、このオリジナルTシャツを協議会のメンバーや地域行事の運営スタッフに配布しています。

■小学校区で取り組むまちづくり。多様な人が想いをひとつにするには？



令和元年度のワークショップの様子

「春日Tシャツ」を作成するというアイデアは、令和元年度に春日地区で実施した「地域活動の活性化に向けたワークショップ」の中で生まれました。

「地域活動に携わる方の一体感を高める」とともに、「地域行事を実施した際に、行事の参加者が運営スタッフを識別しやすくする」ことを目的に、地域のオリジナルTシャツを作成するというアイデアが出され、ワークショップ後に作成に着手しました。

Tシャツを作成するにあたっては、「少しでも多くの人に着用してもらえるよう、デザインは若い人に考えてもらいたい。」という協議会の思いがありました。そこで、協議会の構成団体で比較的若手が多いPTAが、デザインを担当し中心的な役割を担いました。

■春日小学校の校章「桜」をモチーフに！みんなが着たいと思うデザインへ



春日Tシャツ(裏面)

完成したTシャツは、春日小学校の校章で使われている桜を連想させるデザインで、性別関係なく着やすい赤色の生地を使用し、胸部分には桜のマークが、背面には「TEAM KASUGA」の文字が書かれています。

完成したTシャツは地域の中でも好評で、Tシャツを受け取った方からは、「これを着て地域活動を頑張ろうという気持ちになる。」といった声をもらっています。



Tシャツ表面の桜マークと春日小学校の校章

- ワークショップで地域の課題について議論
→発足して間もない協議会の一体感を創出するために、Tシャツを作成(若手を中心に！)
- 若手メンバーを中心とした次なる取組みの議論
→地域全体で取り組むことができることは何か？
→防災訓練など次々にアイデアが生まれた！(次ページ参照)

組織活性化に関する主な取組み内容

コロナの影響で地域行事が中止となり、Tシャツを作成してからお披露目の機会はまだありません。コロナが落ち着き、Tシャツを着て地域行事が開催できる日を、協議会のメンバーみんなが楽しみにしています！

TEAM KASUGA で、参加したくなる「防災訓練」を構想中

春日小学校区地域協議会では、Tシャツの作成のほかにも、様々な新しい取組みに挑戦しています。その1つが上穂積公園での防災訓練です。

この取組みも、令和元年度のワークショップで出てきた「上穂積公園には、かまどベンチが設置されているが、誰もその使い方を知らない。」という意見がきっかけとなっています。

「春日地区では、防災に関する取組みがそれほど積極的に展開されているわけではなく、取組みを強化していく必要があると考えていた。そんな中、ワークショップでかまどベンチについての意見があり、かまどベンチの使い方を学べる防災訓練の実施に向けて動き出した。」と、小河会長は話します。

この取組みも若手が中心となり準備を進め、参加したいと思えるような様々なコンテンツを用意しました。

令和2年6月の防災訓練は、コロナの影響で中止となりましたが、令和4年5月に改めて実施する予定です。

防災訓練で準備した「3つのコンテンツ」
①かまどベンチを使用した炊き出し
②マンションのベランダに設置されている仕切り板を突き破る体験コーナー
③起震車で地震の揺れ体験

活動したくなる工夫！ ～若手の声から新たなアイデアが生まれる～

このように春日小学校区地域協議会では、若手メンバーが中心となり様々な取組みを進めています。「協議会には若手メンバーが多くいて、様々な提案をしてくれる。防災訓練も、これまでなら消火器を使用するだけで終わっていたけど、内容の充実した訓練を企画することができた。」と、小河会長は話してくれました。

POINT

現在は、次なる取組みとして①協議会のホームページ作成、②地域行事をサポートしてくれる「サポーターの募集」に取り組んでいるほか、③地元のスーパーマーケットと連携して、「地域活動に参加した方にクーポンを発行する」といった、実現が楽しいアイデアも出てきています。

春日小学校区地域協議会では、今後も、若手から出た意見を積極的に活動に反映し、それを実現できるように協議会全体でサポートを続けていきます。

取材を受けた地域の方から一言

春日小学校区地域協議会 小河会長

春日小学校区地域協議会は、春日小学校区の自治会や諸団体の諸問題などを共有し、互いに協力し、地域住民の協力を得て「人と人とのつながりを大切に、住みよい安全・安心な地域社会を目指した取組み」を進めていきます。お住いの住民との親睦を深め、社会教育の一環として事業の拠点になりたいと考えます。

取材をした学生から一言

立命館大学総合心理学部 唐津さん

若い人の参加や、積極的な活動により地域の雰囲気若返っているように感じました。若者の積極的な参加を促すにはある程度の活動の自由（アイデアの採用、活動資金など）が不可欠であると思います。この条件を他地域にも適応していけば、活動団体の高齢化の解決につながる可能性があると思いました。

立命館大学政策科学部 雑賀さん

自治活動において、まずは結束感づくりが大切で、関係構築の緩い段階があつてこそ、自治の実務へとうまくつながっていくと学びました。

立命館大学総合心理学部 土井さん

自治会だけではなく、色々な場所と連携して様々なことを行っているのが印象的でした。



取材後の集合写真
(春日Tシャツを着用して)

大池地区地域活動協議会

地域全体で自治会について考える 「自治会長会」の発足

～自治会の持続可能な運営に向けて～

茨木市では、近年自治会への加入率が低下傾向にあり、自治会役員の高齢化や、活動の担い手不足など様々な課題が生じています。大池地区では、こうした自治会に関する課題を共有し、意見交換する場として「大池地区自治会長会」を立ち上げ、19の自治会が連携を図りながら活動しています。

■各自治会の枠を超えた課題について、一体となって取り組む「自治会長会」

大池地区では、地域の各種団体が連携を図って活動していくために、地域の総合窓口であり、組織間の連携・協働を促す機能を担う統括的な組織として、大池地区の各種団体が参画し「大池地区地域活動協議会」を結成しています。

自治会長会は、地域活動の中で重要な役割を果たしている自治会が、近年加入率の低下や、役員の高齢化などの課題を抱えていることから、自治会の課題に特化した意見交換を行う場として、大池地区地域活動協議会の中に組み込まれ、令和2年度に発足しました。

自治会長会では、所属する19自治会の会長が定期的に集まり、感じている課題や活動内容を共有するとともに、各自治会の枠を超えた課題については一体となって課題解決に取り組んでいます。

■今後の自治会運営について、新たなアイデアを！ワークショップを実施

自治会長会が立ち上がった令和2年度は、コロナウイルスの影響により思うような活動が出来ませんでした。4回の自治会長会を開催し、各自治会の活動や課題を共有しました。

また、自治会長会を対象としたワークショップを市と連携して実施し、今後の自治会活動や、自治会長会の役割について検討しました。

ワークショップでは、①事業者¹に自治会運営を一部委託して、役員²の負担を軽減する、②地域のボランティア制度³を作って、若い人が気軽に活動に参加できる環境を作るなど、今後の自治会活動について様々なアイデアが出ました。

そして現在、自治会長会では、共有した課題の解決や、出されたアイデアの実現に向けて、「自治会課題の対応を考える検討会」を立ち上げて検討を進めています。



自治会長会を対象としたワークショップの様子

加入促進・
組織活性化に
関する主な
取り組み内容

- 自治会長会の開催
- 4回実施し、自治会の活動や課題を共有
- 自治会長会でのワークショップ
- 今後の自治会活動に向けたアイデアを議論

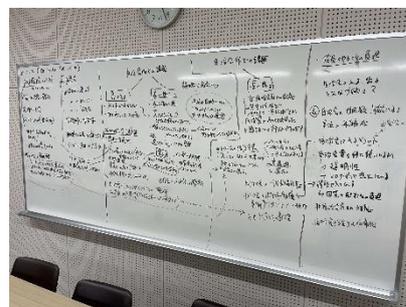
■課題解決の方策に特化して議論「自治会課題の対応を考える検討会」

自治会長会が発足し、各自治会の活動内容や課題の共有ができるようになりましたが、自治会長会では、連絡事項や報告すべき事項も多く、地域課題の解決方策について検討する時間はどうしても限られてしまいます。

そこで、自治会長会の中でも、課題の解決方策や今後の方向性を考えるための特化した場として、検討会が立ち上がりました。

検討会のメンバーは8名で、自治会長会から選出された7名に加え、コンサルタントがアドバイザーとして参加しています。

今後は、月1回ほどのペースで検討会を開催し、アドバイザーの助言を受けながら、課題解決の方策について検討を進め、令和3年度末には、一定の方向性や具体的に大池地区で取り組んでいく方策をまとめて、自治会長会に報告・提案を行う予定です。



自治会長会の議論のまとめ

■大池を支える自治会組織～地域活動の花を咲かせるために～

POINT

これらの自治会長会の取組みについて、「自治会は大池地区を支える一番重要な組織であり、地域活動の花を咲かせる木の根の部分だと思う。木を枯らさないためにも、自治会長会の活動を通して、自治会の課題を共有、解決し、新しい自治会を育てていきたい。」と、自治会長会の佐藤会長は話してくれました。

まだ、自治会長会が発足して1年半程ですが、大池地区の地域活動の重要な要として、今後も自治会長会は活動を続けていきます。

■取材を受けた地域の方から一言

大池地区地域活動協議会 水原会長

大池地区自治会長会は、大池地区が安心して安全なまちになるよう、大池地区にある19自治会の連携を図り、各自治会の枠を超えた課題について一体となって取り組むとともに、大池地区における歴史や文化の継承にも寄与しています。

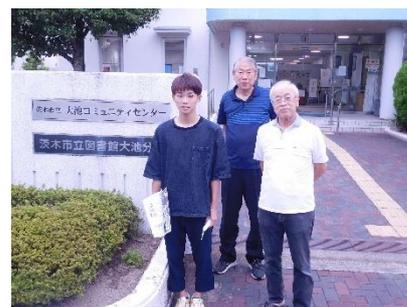
大池地区自治会長会 佐藤会長

コロナ禍の2年は自治会活動を自粛したことにより、会員の自治会離れに拍車がかかりました。このような中で、自治会長会としては、大池地域の子どもの育成、地域文化の継承、非常時の備え等のためには、日頃から地域の人とのつながりが重要なことと捉え、各自治会が連携し、地域での自治会の必要性和魅力を発信していきたいと思えます。

■取材をした学生から一言

追手門学院大学地域創造学部 橋田さん

自治会未加入世帯の増加やコロナ禍による地域つながりの希薄化など、抱える問題は数多くありますが、地域ボランティアの導入や自治会長会のように新しい仕組みを構築するなど、解決に向けた取組みが行われていました。大池地区全体と規模が大きいため、課題も多く出てきますが、規模が大きいためこそ連携して取り組むことができると感じました。



取材後の集合写真

グレースィ茨木プリマージュ自治会

住民ニーズに対応した活動と情報発信 機関誌「G.I.P.」と「KMD」の創設

～暮らしやすい環境の実現に向けて～

グレースィ茨木プリマージュは、平成9年に岩倉町に建設されたマンションです。全世帯が自治会に加入しており、住民ニーズや課題への対応を行うとともに、2か月に一度機関誌を発行し、管理組合活動・自治会活動を見える化するなど工夫した取り組みを行っています。

■課題に対応する多様な委員会～女性中心で活動するKMDって？～

グレースィ茨木プリマージュ自治会では、一斉清掃や消防訓練などの地域活動のほか、マンションでのミニ・クリスマス会など、住民が交流できる取り組みを実施しています。

マンション内の課題等については、毎月の管理組合の理事会で議論するとともに、必要に応じて、臨時総会や通常総会などでも議論を行っています。また、住民が安心して暮らすために、住民ニーズを把握するためのアンケート調査を適宜実施しています。

マンションでは、大規模修繕や規約の改定など、テーマごとに専門委員会を設置しています。専門委員会はその分野に造詣のある、あるいは熱心に取り組もうとする住民で構成され、それぞれのテーマについて、住民同士で検討を行います。平成29年には、平成28年に改訂した管理規約を具体的に検証し、より住民ニーズに沿った規約としていくことを目的として、KMD(これからのマンション生活をデザインする会)が創設されました。

POINT

KMDは、30～50代の女性を中心とした5～6名ほどで構成されています。その理由として、「これまで、総会や専門委員会のメンバーは男性が中心で、日常生活の中心的役割を担う女性の声 that 反映されにくい状況だった。そこで、少しでもこの状況を打破したいと思った。」と、安谷会長は話してくれました。

KMDでは、「マンションにおけるペットの飼育」「駐車場料金の見直し」「集会室の活用」など、管理規約に関連する幅広いテーマに取り組んでいます。また、各テーマについてのアンケート調査や、これまでになかったイベントの企画・提案なども行っています。ミニ・クリスマス会の取り組みも、KMDが提案し、実現したイベントの1つです。

これまでも、自治会活動を通して住民同士が交流する機会(地域一斉清掃や消防訓練など)はありましたが、自治会が交流を目的に行う活動には積極的に取り組んでこなかったのが、ミニ・クリスマス会は初めての試みとなりました。マンション建設から20年以上が経ち、子どもも成人し、交流機会が少なくなっていた中で、ミニ・クリスマス会での交流は貴重なものとなっています。ただし、ここ2年はコロナ禍で止むなく中止となっています。



ミニ・クリスマス会の様子

自治会の活動を見える化する機関誌「G.I.P.」の発行

平成29年の管理組合の通常総会で、「理事会の活動内容がわかりにくい」との意見があり、理事会や自治会の各種活動についてわかりやすく伝えるリーフレット形式の機関誌「G.I.P.」を平成30年9月から発行しています。写真が多く掲載されており、手にとりやすいもので、「理事会や自治会の活動がわかりやすい」との声ももらっています。発行から4年が経ち、今後は一方的に情報を伝えるだけでなく、双方向性を重視した機関誌に変わるような仕組みを考えたいとの事でした。



機関誌「G.I.P.」

進む住民の高齢化～暮らしやすい環境の実現に向けて～

住民の高齢化が進み、今後は若い世代が積極的に地域活動に参加していくことが重要となってきます。安谷会長は、「例えば、集会所をオープンにしていずれも課題を話し合える場を設けることも一つの手段だと思う。そこに若い世代が気軽に集まり、意見交換をして、創造性に富んだマンション生活に期待したい。」と、今後について話してくれました。

- 多様な専門委員会を中心とした、課題解決に向けた取組み
 - ・女性中心で活動する KMD をはじめ、多様な専門委員会が活動
- 機関誌「G.I.P.」の発行
 - ・2か月に1回発行。発行から4年間、継続して取り組んでいる。

組織活性化に関する
主な取組み内容

取材を受けた地域の方から一言

グレースィ茨木プリマージュ自治会 安谷会長

自治会の一人一人はニュートラルな意見を持っていても、なかなか本音で語り合うことができないというジレンマがあります。こうした風潮を少しでも瓦解することが出来たら、管理組合や自治会活動はもっと円滑に進めることができるだろうと考えます。

取材をした学生から一言

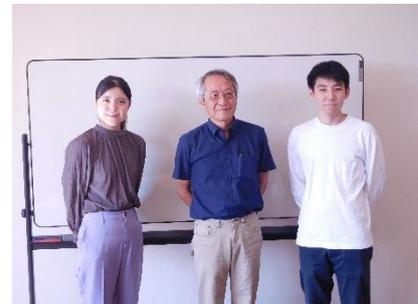
立命館大学政策科学部 片桐さん

マンション内の住民の方々や周辺地域の方々に少しでも良い生活環境で過ごしてほしい、という安谷会長の想いが伝わってきました。他者のことまで、地域のことまで、常に考えて暮らしている方々は現代においてそう多くはないでしょう。しかし、安谷会長は常に課題意識と他者・地域への貢献意識を持って暮らしていることがわかりました。地域の顔役としても唯一無二な存在だと感じました。

立命館大学総合心理学部 影山さん

KMDの創設において、日常生活の中心的役割の担い手である女性の声を反映することに着目した点に関心をもちました。今の時代、男性も家事をすることが増えてきましたが、それでもなお、女性のほうが主な家事をして、男性が「手伝う」というスタイルのほうが多いと思います。そのような観点から、女性の声を取り入れることが、住民全体の生活の質の向上につながると思いました。現在は、候補者を立てて、理事会に承認を受けた人がKMDに加入するという流れとのことでしたが、今後はさらに門戸を広げ、より幅広い年代の方にも参加していただく必要があると思いました。

また、機関誌「G.I.P.」は、理事会での話し合い等のフローが見える化されており、とてもわかりやすいと感じました。理事会に参加していない住民の方は、理事会でどのような議論がされ、どのように自分たちの生活を支えてくれているのかわかることが、身近に感じる第一歩だと感じました。



取材後の集合写真

ジオグランデ東中条さくら通り自治会

マンション住民のつながりを深める！ 災害時の「トラブルメモ」と「簡易トイレ」の配布

～困ったときに助け合える環境をめざして～

ジオグランデ東中条さくら通りは、東中条町に平成21年に建設されたマンションです。平成30年に自治会を設立し、コロナ禍の影響で活動が制限される中、自治会加入世帯のニーズに対応するため、災害時に活用できる「トラブルメモ」と「簡易トイレ」を配布しました。

■マンションが建ってから約10年。自治会を立ち上げた理由とは？

ジオグランデ東中条さくら通りでは、自治会設立について長年議論をしていましたが、マンション建設から10年間は自治会がありませんでした。一方で、「こども会」は平成24年に立ち上がっており、子どもを持つ親世代での交流は以前からありました。住民の中には、自治会がなく、住民同士のつながりが薄い中で、「災害が起きた時に、みんなで対応できるのだろうか。」という不安を持つ方もいました。また、地区自治会連絡協議会が実施している青色防犯パトロールなどにより、地域の空き巣件数が減ってきており、「他の地域組織の活動の恩恵を受けるだけで、自治会もないままでいいのだろうか。」という思いを持つ住民もいました。

長年議論をしても立ち上げには至らなかった自治会ですが、大阪北部地震を経験し、住民の災害に対する意識が高まったことで議論が前向きに進み、平成30年に自治会が立ち上がりました。当初は、こども会でつながりを持ったお母さん世代が、役員や活動の担い手となり、半数ほどの世帯が自治会に加入しました。活動を知ってもらい、自治会に加入してもらいたいとの思いで、地域一斉清掃の際にマンション駐車場の溝の清掃を自治会で引き受けるなど、会員同士の交流を深めていましたが、さらに活動を通じて交流を積み重ねていこうと思っていた矢先、コロナで活動が制限されることとなりました。

■自治会に入って良かった！「トラブルメモ」と「簡易トイレ」の配布

コロナの影響により、令和2年は自治会活動がほとんどできていませんでした。しかし、「自治会を立ち上げた以上、会員に何か還元したい」、「自治会としての歴史が浅いので、何か活動をして次につなげていきたい」との思いから、コロナ禍でもできる取組みとして、①災害時のマンション設備の動作についてまとめた「トラブルメモ」と②ライフラインが止まった時の備えとして、「簡易トイレ」を自治会から配布することにしました。

役員の方々は、「マンションの場合、電気が止まってしまえば水も出ず、トイレも使えないという状況になる。また、エレベーター等のあらゆる設備が電気で動いており、生活に支障が出るので、いざという時に備えてトラブルメモを作成し、配布した。」と、話します。

また、簡易トイレについては、「マンションの場合、自分の階ではトイレが使えても、下の階で配管に亀裂が入っていて水漏れすることもある。災害時にはそういう可能性も考えて、慎重にトイレを使用してほしい」との思いを込めて配布した。」と、教えてくれました。

POINT

トラブルメモと簡易トイレの配布後に、会員からは「自治会に入っていてよかった」「こういう資料が欲しいと思っていた」という声をもらいました。

活動が制限されている中、住民のニーズに対応し、自治会の役割を発揮している点がこの取組みの特徴であり、自治会の活動を続けていきたいとの思いが感じ取れます。



配布した簡易トイレ

管理会社やメーカーに直接連絡し、気になる点を確認しながら作成！
住民の視点で、ほしい情報がわかりやすく伝わるように写真を入れるなど工夫！

コロナ禍で、対面で渡すのが難しいため、ポストに入るサイズのものを購入しポスト投函で配布しました！



自治会で作成したトラブルメモ

■今後の活動の展開は？ ～助け合えるご近所付き合いの実現に向けて～

自治会活動が始まるまでの住民同士の交流は、「こども会」と茨木市の一斉清掃での活動など、多いとは言えない状況でした。自治会が立ち上がったものの、コロナ禍の影響で中々交流機会は増えていませんが、今後は地域行事等に自治会として参加し、自治会活動が根付いていけばと考えています。

また、連絡手段が現状は回覧板しかないので、自治会の緊急の連絡網を構築したいと考えています。緊急連絡や安否確認の際に、LINE やメールを活用することについてアンケートを取った結果、賛成派が多かった一方、セキュリティ面を心配されている方も一部いました。今後はセキュリティ面も考慮し、安全な方法を検討していきたいと教えてくれました。

■取材を受けた地域の方から一言

シオグランデ東中条さくら通り自治会 防災担当 村上さん

取材して下さった大学生の方が、「うちの母も自治会活動やってきました。地域のために働いていたんですね。」とおっしゃっていたのが印象的でした。若い人にも地域の活動を理解してもらい、あらゆる世代の方々が関わり合いながら、活動が広がっていくと良いなと思いました。

■取材をした学生から一言

立命館大学総合心理学部 金子さん

写真を付けてわかりやすくしているトラブルメモや、感染対策を行いながら効率よく配れるようにポストに投函できる簡易トイレを用意するなど、取組みにおいて沢山の工夫がされていると思いました。コロナ禍で活動しにくい環境の中でも、できることを模索している姿勢がとても良いなと思いました。

立命館大学総合心理学部 神田さん

コミュニティの大切さは、災害などの「もしも」が現実になってしまった時、初めて気づくことが多いのかもしれませんが。その大切さにいち早く気づき、積極的に行動されているので、緊急連絡網の構築についても実現されるのではないかと思います。

立命館大学総合心理学部 古田さん

コロナ禍で自治会自体の活動も制限される中、住民のニーズに対応した（結果的に住民からの反応が良かった）ことをして素晴らしいと思いました。限られた活動の中でも、コロナ対策への工夫（ポスト投函による簡易トイレ配布）もしっかりと行っている点が特に素晴らしいと思いました。



取材後の集合写真

上野第二自治会

自治会役員負担を軽減した 「高齢化対策プロジェクト」

～持続可能な自治会運営に向けて～

上野第二自治会では、役員の高齢化や役員負担の大きさが以前より課題となっていました。この課題を解決するために、自治会内で「高齢化対策プロジェクト」を立ち上げ、持続可能な自治会の運営に向けて、工夫した取組みを行っています。

■自治会役員の高齢化 どうすれば役員負担を軽減できるのか？

上野第二自治会では、これまで大きく2つの課題がありました。

①上野第二自治会には9つの班があり、各班長は、班長の役割に加えて、自治会の各種委員を兼任することとなっていました。世帯数の少ない班では、5年に一回ほど班長が回ってきて、班長になれば、自分の班の活動と併せて委員の活動も行う必要があり、班長の負担が大きくなっていました。

②班長は基本的に1年交代の輪番制のため、自治会の委員を兼任しても、何をすればいいかわからず、わかった頃には任期が終わるという状況で、委員の活動に深く取り組むことは難しい状況でした。

会員の高齢化率が高く、班長の負担が大きい現状の体制のままでは班長の成り手もなくなり、自治会の活動を続けていくことは難しいと感じたことから、平成25年度に今後の自治会の体制について検討する「高齢化対策プロジェクト」を自治会内で立ち上げました。

■自治会役員負担を減らす「高齢化対策プロジェクト」

プロジェクト立ち上げの翌年、第一歩として、班長が各種委員を兼任する体制の見直しを行いました。具体的には、班長を兼任しないサポート委員を設置し、班長以外でも委員に就任できるようにすることで、各分野(各委員会)の活動に選任で取り組める体制としました。サポート委員は、会員に個別に声をかけて募集し、現在では、年に1度会員にチラシを配布して、新しい委員を募っています。

サポート委員も役員会の議決権を有しており、サポート委員の意見を反映させられる体制となっています。

POINT

その他の見直しとして、平成27年度には、①これまで輪番制の班長の中から自治会長を選出していたのを、立候補による選出に変更②輪番制ですぐに班長が回ってこないよう、9つの班を5つに統合しました。

さらに、平成30年度からは、班長とサポート委員の兼任を完全に廃止し、委員はサポート委員だけとしました。

他にも、これまで班長が班員から個別に徴収していた募金の収集方法も見直すなど、班長の負担軽減を図った結果、班長の役割は年に1度の会費の徴収と、回覧板の配布だけとなり、高齢者世帯や共働き世帯でも班長の役割を担えるようになりました。

サポート委員について中井会長は、「設置した平成26年度から委員を継続してくれている方が多く、それぞれの委員会の活動を熟知した人材が育っている。各委員がその分野の活動を熟知しており、例えば体育委員は地区体育祭の出場者の募集の段取りなどをわかっている、円滑に準備が進み、会長の負担も少なくなっている。このことが、会議回数の減少や会議時間の短縮にもつながっている。」と、話します。

上野第二自治会では、役員やサポート委員が会議以外の活動に参加した場合は、1回500円の商品券を支給しています。

■ 役員の負担を軽減し、地域のことを知ってもらう学生有償ボランティア！

公民館が主催する「地区体育祭」「ふるさと祭り」「文化展」等の地域行事には、自治会から動員をかける必要があり、以前は班長が参加していました。しかし、班長の負担が大きいため、平成28年度からは、地域の中学生以上の学生に有償ボランティアの募集をかけ、手伝いに行ってもらいました。

これにより、班長の負担の軽減を図るとともに、学生が手伝いに行くことで、一緒に参加する大人も楽しく活動することができるようになりました。この試みは3年ほど継続しましたが、学生が集まらなくなったため現在は終了しています。

「地域の学生と関わる機会は少ないので、有償ボランティアの取り組みは、地域の大人と地域の学生がつながりを持つ貴重な機会だった。また希望があれば募集したい。」と、中井会長はこの取り組みについて話してくれました。



説明をする中井会長

組織活性化に関する主な取り組み内容

- 体制の変更
 - ・班長と委員を兼任しないサポート委員を設置→会長を立候補制に(以前は輪番制の班長から会長を選出)→班を9班から5班に再編成→班長とサポート委員の兼任制を完全廃止
- 仕事の簡略化など
 - ・班長の役割を1年に1度の自治会費の徴収と、回覧板の配布だけに変更
 - ・公民館主催行事等で、学生有償ボランティアを導入(現在は終了)

■取材をした学生から一言

立命館大学総合心理学部 天久さん

少子高齢社会の中で、自治会を存続させるために、活動している方の負担を減らすなど、工夫されていてとても勉強になりました。

立命館大学政策科学部 片桐さん

今回は耳原公民館で取材させていただきましたが、あまり公民館に行く機会がないのでとても新鮮でした。役員が役割を責任をもって果たされ、イベントも定期的に行われており、とても安定しているなと感じました。公民館と自治会にどこか和やかな雰囲気を感じ取ることができました。



取材後の集合写真

自治会主催 「誰もが参加できる地域行事」

～いろいろな地域行事を通じて、親睦を深める～

JRの千里丘駅より歩いて5分ほど、茨木市と摂津市の市境に蔵垣内は位置します。享徳(きょうとく)の時代(1452年～1455年)から蔵垣内にあるとされる井於(いお)神社がシンボルのこの地域で活動する蔵垣内自治会は、近年自治会加入率が低下傾向にあることから、地域のつながりを維持するために、自治会独自の様々な行事を開催しています。

■新たな地域の名物行事！住民が楽しむ、自治会主催の「音楽祭」

蔵垣内自治会が実施している行事の一つとして、「蔵垣内音楽祭」があります。この音楽祭は、毎年2月に地域の自治会館を会場に、プロの演奏家や地域の中で音楽をしている方を演奏者として迎え、地域の方に身近に音楽を楽しんでもらおうと、自治会が主催しています。

プロの演奏家や地域の子どもの演奏まで、ジャンルを問わない楽しい音楽祭です♪

この音楽祭は、「地域の子ども達に音楽に触れてほしい。」という思いから平成22年にスタートし、それ以降、コロナが流行する前年の平成31年まで継続して実施していました。音楽祭には子どもから大人まで毎年50名ほどの地域住民が参加し、大いに盛り上がりを見せます。

当初は、茨木市の補助金を活用していましたが、現在は自治会で費用を負担して音楽祭を実施しており、今やすっかり蔵垣内の名物行事となっています。



蔵垣内音楽祭の様子

■「盆踊り大会」と「餅つき大会」～地域の集いの場で行われる恒例行事～

蔵垣内地区には、地域の活動の場として「蔵垣内公園」と「井於神社」があり、そこで「盆踊り大会」と「餅つき大会」を開催しています。

盆踊り大会は、例年8月下旬に蔵垣内公園で開催し、自治会で櫓(やぐら)を組み、自治会の他に地元の消防団や婦人会など、地域の方が協力してお店を出します。

また、餅つき大会は、例年12月に井於神社で実施しており、参加者にはつくたてのお餅が振る舞われます。餅つき大会は、当初蔵垣内公園で実施していましたが、古くから地域に根ざす井於神社との関わりが近年薄れているとの問題意識があり、5年ほど前から井於神社で実施するようになりました。

盆踊り大会も餅つき大会も毎年200～300名の地域住民が参加する地域の一大行事です。



餅つき大会の様子

■誰もが参加できる地域行事！～主催する自治会の思い～

このように蔵垣内自治会では、年間を通して地域住民が楽しめる様々な行事を実施しています。

POINT

その理由として、「地域での触れ合いが少なくなっていると感じた10年ほど前から行事を増やした。行事を通して地域に愛着と「帰属意識」を持ってほしい。」と、山野会長は話します。

蔵垣内自治会の行事の特徴は、自治会加入の有無に関わらず、蔵垣内に暮らす全ての住民が参加できるという点です。参加条件を設けない理由は、地域に住んでいれば「みんな一緒」という感覚があることと、自治会未加入の方も行事をきっかけに自治会に参加してほしいという思いからです。

■～持続可能な自治会運営に向けて～ 日頃の交流で地域をつないでいこう！

自治会の加入率が低下する中、蔵垣内自治会では、自治会未加入世帯や引っ越してきた世帯に、各組の組長が戸別訪問して自治会加入や行事への参加を呼びかけるなど、活動をPRしています。

また、蔵垣内自治会では、多くの企業が特別会員・協力事業所となっています。地域と企業がつながる良好な関係によって地域活動を支えています。

自治会主催の行事をより楽しく、充実させるために、今後は、行事を手伝ってもらうサポーターの募集や、茨木市内の大学生にも行事に参加してもらうなどの取組みもしたいとのことでした。また、「人との触れ合いが地域の親睦を深めることになるため、日頃の交流を大切に、住民が安心安全に過ごせるように、心豊かなまちづくりをめざしていきたい。」と、山野会長は今後の思いを語ってくれました。

地域行事が地域のつながりを維持するために重要だと認識されているので、自治会役員や活動の担い手の協力を得られています！
そのため、行事運営に課題は感じていないとのことでした。

- 自治会主催の音楽祭
 - ・子どもから大人まで多くの人に参加し盛り上がる
- 地域の集いの場で行われる恒例行事
 - ・蔵垣内公園と井於神社で、「盆踊り大会」と「餅つき大会」を開催

親睦・ふれあい
に関する
主な取組み内容

■取材をした学生から一言

立命館大学総合心理学部 土井さん

個々での活動は子どもの情操教育と防災に重きを置いているように思われました。また、音楽祭や大きなお祭りも実行しており、文化も大事に継承されているのが印象的でした。

追手門学院大学地域創造学部 橋田さん

取材前は、大阪のような都市部の地域は、住民同士の関わりがあまりないと思っていましたが、地域内で住民交流が行われていることと、いかに自治会が地域にとって必要かということが分かりました。活動内容を地域外にも発信していくことで、地域外の人にも知ってもらうことが必要だと感じました。

立命館大学総合心理学部 ヤンさん

「帰属意識」とそれを支える「日頃のふれあい」が、蔵垣内自治会の重要なキーワードであると思いました。参加条件を設定しないことで、住民が気軽に参加できるような取組みだと感じました。



取材後の集合写真

地区に根付く「太鼓巡行」

～泉原の音色、地区の絆を子ども達につなぐ～

泉原地区では毎年10月上旬に、地区内にある素盞鳴尊(すさのおのみこと)神社と諏訪(すわ)神社で収穫に感謝する秋祭りが実施されており、毎年、この秋祭りに合わせて、泉原自治会が主催する太鼓巡行が行われています。

江戸時代から続く伝統行事！想いを受け継ぎ、復活した「太鼓巡行」



現在の太鼓巡行の様子

太鼓巡行では、鉄製の台車に乗せた太鼓をお揃いの法被を着た地元小学生が4人1組で打ち鳴らし、太鼓の乗った台車を消防団員などの地区の若手を中心となって、「アーヨイヤサッサー」という威勢の良い掛け声をあげながら牽引します。

地区の北側にある素盞鳴尊神社を出発し、半日ほどかけて南側の諏訪神社まで巡行、最後は素盞鳴尊神社に宮入りするというルートで地区を一周します。

巡行は、江戸時代末期から続く泉原地区の伝統行事です。人手不足の影響から昭和33年に一度途絶えましたが、「もう一度あの勇壮な太鼓を聞きたい。」という住民の声から昭和62年に復活し、それ以降継続して実施されています。(令和2年と令和3年はコロナの影響により中止)

かつては、太鼓に乗せた櫓(やぐら)を成人が担いで地区を練り歩いていましたが、昭和62年の再開の際に、人手不足の中でも実施できる方法はないかと考え、安全面にも配慮して、太鼓と小学生が乗った台車を引いて巡行を行う今の形となりました。

巡行の形は変わっても、太鼓ではやす3種類の曲調は今も変わっていません。伝統を守りつつも、時代の変化に対応している点がこの活動の「すごさ」であり、長年継続している秘訣でもあります。

3か月かけて、地域全体で準備！～子ども達とともに～

10月の太鼓巡行本番に向けて、例年7月頃に自治会を中心とした運営委員会が泉原地区で立ち上がります。運営委員会のメンバーは40名ほどで、地区の各種団体の代表者が参加し、3か月程かけて当日に向けた準備を進めていきます。

太鼓巡行当日に太鼓を叩く子ども達も、本番の1か月ほど前から、毎週土曜日に泉原老人集会所に集まって、地元消防団員指導のもと太鼓の練習に励みます。かつては泉原地区の小学5・6年生が太鼓を叩いていましたが、今では地区に暮らす子どもの数が減少したため、小学3年生以上の子どもが、太鼓の叩き手の役割を任されています。

かつて太鼓を叩いていた子どもが、大人になって消防団に入り、今度は太鼓を教える側に回るということもあります！

■ 地区で子どもを育てる！～地区のつながりを作る重要な活動～

泉原地区で長年続く太鼓巡行。この活動には、「子どもを地区の宝として育てたい」という住民の思いも込められています。

「昔に比べて今は、日常的に子どもと顔を合わす機会が少なくなり、太鼓巡行は地区の子どもと大人がつながりをもてる貴重な行事で、声を合わせて熱心に練習する子ども達の姿を、地区のみんなで見守っている。」と、西谷会長は笑顔で話します。

また、子どもの時に太鼓を叩いたことを今でも覚えているようで「泉原での記憶に残る思い出を作ってあげたい。」という思いは強く、そして温かく感じられました。



太鼓を練習する子ども達

POINT

「自治会が中心となって実施している地区の住民が参加できるイベントである太鼓巡行は、自治会としてのまとめりや、他団体とのつながりを深める意味でも重要だ。」と、会長は話します。

この取組みは、単に子どものためだけの取組みではなく、各種組織が連携・協力し、地区の中のつながりを作っていく上でも大きな意味を持っているのです。

■ カタチを変えても、地区で伝統をつないでいく

この伝統をつないでいくために、今後の課題はなんといっても少子高齢化による人手不足です。太鼓を叩く子どもが少なくなっており、地区内の高齢化も進行しています。また、活動に参画しているメンバーが長年同じというのも課題の1つです。「地区の伝統的な行事を今後も継続していくために、中心となって活動を引き継いでくれる若い方を探していきたい。」と、岡副会長は話します。

西谷会長も「自治会として地区の伝統を守っていく使命があると思っている。今後も継続できる方法を模索しながら、カタチを変えても続けていきたい。」と、前向きに話していました。

- 太鼓巡行に向けて3か月かけて準備
 - ・運営委員会を中心に準備を進め、子ども達も太鼓の練習に励む
- 太鼓巡行を続けるための工夫
 - ・地区の実情に合わせて、太鼓巡行の方法・形態を検討

親睦・ふれあい
に関する
主な取組み内容

■ 取材を受けた地域の方から一言

泉原自治会 向條さん

記憶を辿ると、太鼓を叩く息子の姿を見た時、成長を感じ感動したことが思い出されます。地区のつながりが希薄になりつつある現代ですが、絆を深める貴重なイベントとして末代に渡り受け継がれることを望んでいます。

■ 取材をした学生から一言

立命館大学総合心理学部 加藤さん

お話を聞いて、地区の魅力を感じました。太鼓巡行は実際に見てみたいと感じました。また、自然豊かな土地なので夏の蛍の時期も足を運びたいです。自然に触れられるこの地区を大切にしていきたいです。

立命館大学政策科学部 雑賀さん

時代変化の中で伝統を残すために、地区で子どもを育てるという核心は変わらず、危険を除き巡行の参加が難しい人にも祭を味わってもらおう工夫をしたり、柔軟に形を変えている点が印象的でした。

立命館大学総合心理学部 ヤンさん

太鼓巡行の活動を通して、泉原地区の住民の方々と子どもに意味のある地区のイベントとして体感してもらい、住民同士のつながりを作ってもらおうように日々取り組んでいるんだと感じました。



取材後の集合写真

西河原自治会

一時避難場所MAPの作成と 防災倉庫の設置

～地域で災害時の初動に備える～

平成30年3月に開業したJR総持寺駅。そのすぐ北側の西河原地域で組織されているのが西河原自治会です。西河原自治会では、自治会独自の防災に関する取組みを積極的に展開しています。

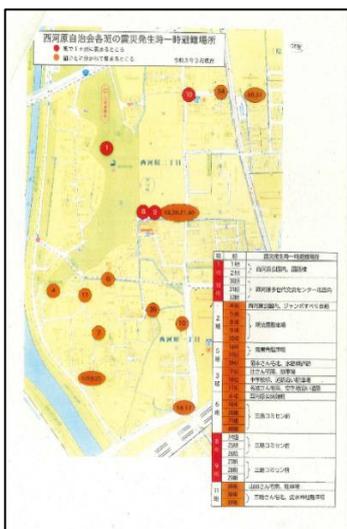
■ 震災に対する危機感が高まった大阪北部地震。私たちにできることは？

大阪府下の他の地域と同様、西河原地域は、防災に関して特別に意識が高い地域ではありませんでした。西河原地域のすぐ西側には安威川が流れており、同じ安威川沿いでも、三島丘・総持寺といった地区に比べて西河原は低地です。「立地条件から水害については、地域として以前から危機感を持っていたが、地震に対する危機感は薄かった。」と、大島会長は話します。

そんな西河原自治会で地震に対する意識が高まったのは、平成30年の大阪北部地震がきっかけでした。大阪北部地震の後、西河原自治会では地震に対する備えとして「一時(いつき)避難場所」を自治会の組ごとに決めて、そこで安否確認を行い、その後指定避難所に向かうという取組みを始め、「一時避難場所 MAP」を作成しました。

地震発生時に多くの人が一斉に指定避難所に向かえば、人が溢れかえって混乱を招いてしまいます。そのような事態を防ぐために、地域として何かできることがないかと考え、自治会としてこの取組みを始めました。

■ 地域で迅速な対応を！ 災害時、「一時避難場所」へ自治会の各組長が誘導！



組長に配布した
一時避難場所 MAP

自治会の中の30組を9つのグループに分け、各グループで一時避難場所を決めて、「いざという時は一時避難場所に集まり、来ていない人がいればその人の安否を確認しよう。」と、自治会内で共有しています。

POINT

この取組みの中心は各組の組長です。一時避難場所の取組みに関する文書は組長だけに配布し、住民への周知を任せています。その理由として、「あえて組長だけに書類を渡すことで、この取組みの中心にいと自覚を持ってもらいたい。」と、大島会長は話します。

また、「ここ2年間は、コロナの影響により自治会の総会も実施できなかったが、コロナが落ち着けば体制を立て直し、引き続きこの取組みを自治会の中で共有していきたい。」と、大島会長は話してくれました。

■災害に地域で備える！「自治会防災倉庫」の設置へ

大阪北部地震後に、自治会で防災倉庫を設置し、防災用品を備蓄するという取組みも始めました。

大阪北部地震や平成30年の台風21号で被災した直後に、必要なものが手に入りにくかったという実体験をもとにスタートしました。

平成30年の台風21号の際には、多くの住宅で屋根に被害が発生し、応急処置用のブルーシートが市内で不足する事態となりました。

この経験から、毎年予算を組んで重点的にブルーシートを購入しており、ここ3年間で何十枚かのブルーシートと、それをくくるための紐やガムテープなどを揃えています。



自治会で設置した防災倉庫

■時代の流れに合わせた防災活動とは？

これまで、災害時の初動に備えるために、一時避難場所MAPの作成と、ブルーシートを中心とした防災用品の備蓄を進めてきました。

「今は、SNSで安否を確認する時代になっており、災害発生時、救助が来るまでの連絡手段が必要になってくる。停電時にスマートフォンの充電ができるよう、次は簡易発電機の購入を考えている。」と、今後の災害への備えのアイデアを大島会長は教えてくれました。

また、今後の防災活動について、「大阪北部地震を受けて地域の防災に関する意識は高まった。しかし、時間が経つにつれて、その意識も薄れてしまう。薄れていく危機感を呼び覚ます意味でも、地域として積極的に防災に関する取組みを行っていきたい。」と、話してくれました。

防災に関する 主な取組み内容

- 一時避難場所MAP
 - ・組長に配布し、災害時に住民を近くの一時避難所に誘導
- 自治会で防災倉庫を設置
 - ・災害時の初動に備えるために、ブルーシート等を備蓄

■取材を受けた地域の方から一言

西河原自治会 大島会長

発電機購入について、取材後「超加速経済アフリカ」という興味深い本を読みました。「電気は来ていなくても、スマホは皆持っている。」スマホの充電は？答えは、ソーラーパネルと充電電池、LEDランプ、充電用ラジオなどがワンセットになった商品が大ヒット。基盤が未整備なことが強みに。防災の視点で見ると大いに考えさせられます。

■取材をした学生から一言

立命館大学政策科学部 雑賀さん

防災対策は幅が広い中で、自治会として焦点を当てた備えが明確になっており、頼もしいと感じました。私は高校時代、被災地視察・報告活動をして、防災に対する理解の浸透や継承の難しさを実感したので、自治会の地道な防災活動に意義と敬意を感じました。

追手門学院大学地域創造学部 堀江さん

「防災意識は時間と共に薄れていく」という会長の言葉が印象に残りました。大阪北部地震を経験し、一時避難場所の取組みを考えてきた会長の言葉だからこそ重みを感じました。私自身も考えていかなければいけないと思いました。

立命館大学政策科学部 山田さん

大学で防災や地域について学んでいても、実際に地域の方に具体的な取組みをお聞きできる機会が無かったので、とても勉強になりました。



取材後の集合写真

三島地区連合自治会

高齢者中心の自主防災会からの脱却へ 若者に想いをつなぐ防災教室

～若い世代の防災活動参加のきっかけづくり～

地域住民が「自分たちの地域は自分たちで守る」という意識のもと、自主的に連帯して防災活動を行う組織のことを「自主防災組織」と言います。三島地区自主防災会は、三島地区連合自治会を母体とする組織で、19の自治会から選出された防災委員と、防災への関心が高い有志の方が集まって活動しています。

■自主防災会の担い手は高齢者。災害時では、支援が必要な立場の人も…。

三島地区自主防災会が行う取組みの1つとして、毎年11月に実施している防災訓練があります。①初期消火訓練、②AED訓練、③火災の煙体験など、参加した地域住民が普段体験できない様々な防災体験ができるので、子どもから大人まで多くの住民が参加しています。

しかし、数年前まで、訓練に参加するのは高齢者の方がほとんどで、10代・20代の若い世代の参加は非常に少ない状況でした。大島会長は「実際に災害が起きた時に、高齢者の方はどちらかと言えば助けられる側の人間で、高齢者の方を助ける10代や20代の若い世代の方に防災に関する活動にもっと参加してもらう必要がある。」と、話します。若い世代に防災の活動に参加してもらうために、三島地区自主防災会ではこれまで様々な取組みを行ってきました。

■若い世代に伝えたい！ どうすれば、防災活動に興味を持ってもらえる？

若い世代に防災活動に参加してもらうために、親子で参加し、防災に関する様々な知識を学べる親子防災教室を自主防災会で企画しました。三島小学校全児童にチラシを配り、「親御さんを連れて参加してください。」と呼びかけましたが、親子で参加してくれたのは数組だけでした。

この失敗を生かして翌年は、まず子どもに参加してもらうことを重視して、まちづくり協議会やこども会と連携し、「初期消火訓練用の作的作り」を企画しました。

この作的作りの企画は、毎年11月の防災訓練で行う、消火器を使用した「初期消火訓練」の作的を工作するというもので、まずは楽しみながら作的作りをしてもらい、自分で作った作的を倒すために、11月の防災訓練にも来てもらうという一連の流れを狙った企画でした。

工作に興味を持って多くの子どもが参加してくれれば、子どもの付き添いで親も活動に参加してく



完成した的



的づくりをする子ども達

れるのではないかと狙いもありました。結果的に狙いは2つとも的中し、工作を楽しみに多くの子どもが作的作りの企画に参加し、付き添いで30・40代の親御さんも来てくれました。

作的りに参加した親子が、11月の防災訓練にも参加し、30・40代の親世代にも初めて参加してもらうことができました。

■ 小学校と連携した「防災教室」 ～地域の防災士から子どもが防災を学ぶ～

若い世代が防災に関心をもち、活動に参加してもらうために行っているもう一つの取組みが、三島小学校と連携して7年前から実施している「防災教室」です。

この防災教室は、三島小学校の4年生を対象にした取組みで、授業時間を使用して、初期消火訓練や担架を使用したの搬送訓練などの様々な体験を行います。終了後には、「三島こども防災リーダー修了証」と「非常食のカレー」を生徒に渡しています。



防災教室の様子

POINT

防災教室をきっかけに、子どもに継続して防災に関する活動に関わってほしいと考えており、まずは防災訓練に参加してもらえるよう、防災教室終了後にももらえる「修了証」を持って11月の防災訓練に行けば、「非常食のカレー」をもう1つプレゼントするという工夫もしています。

この取組みについて、大島会長は「学校と連携し、子どもや若い世代の防災意識を高める取組みを行うことで、教える側である地域の防災士の意識の向上にもつながっている。」と、話します。

■ 災害時に若い世代が活躍してほしい。そんな願いを込めて…。

このような活動を通して、三島地区では以前に比べて、防災活動への若い世代の参加が増加しました。しかし、それでも活動の担い手や参加者は高齢者が中心です。

大島会長は今後に向けて、「活動を通して、40代・50代の防災士も育てている。今後は若い世代の防災士が中心となって支えてもらい、防災の取組みを自治会などにも広めてほしい。」と、話しておられました。

大島会長には、会長を兼任している西河原自治会の取組みについても、取材に協力頂きました。

防災に関する主な取組み内容

- 毎年11月に実施している防災訓練
- 初期消火訓練、AED訓練、火災の煙体験等を実施
- 若い世代に防災の活動に参加してもらうための取組み
- 親子防災教室→初期消火訓練用の的作り
- 三島小学校と連携した防災教室の実施

■ 取材を受けた地域の方から一言

三島地区自主防災会 大島会長

三島地区自主防災会には、令和3年度現在、9名の防災士が誕生しました。40代・50代の青年・女性を積極的に推薦してきました。防災士が、地域の防災委員等と力を合わせ、地域住民の防災・減災の向上につながる取組みの橋渡し役となる活動をしていくことを大いに期待したいと思います。

■ 取材をした学生から一言

立命館大学政策科学部 雑賀さん

真剣な事柄を面白がられる方法で伝えることは難しいことですが、年配の方が若い方を防災に引き込むために工夫を凝らしていることが素晴らしいと思いました。

追手門学院大学地域創造学部 堀江さん

若い世代に知ってもらうために様々な取組みを考え、実行し、またどうやったらもっと良くなるか常に考えておられることや、会長さんの想いを知りました。このことが多くの地域住民の方に伝わって欲しいなと思います。

立命館大学政策科学部 山田さん

子ども達に防災について知ってもらうことで、地域を含めた防災意識の向上につながると感じました。防災に視点を向け活動している所を、多くの市民の方に知って欲しいと感じました。



取材後の集合写真

空き巣対策！ 地域オリジナル「防犯ポスター」 ～自分たちの地域は、自分たちで守る～

阪急茨木市駅から歩いて10分程のところにある中村町。中村町の町内を歩くと、「みんなの街は、みんなで守ろう！」と書かれた A5サイズのイラスト入りポスターが所々に掲示されています。

■防犯ポスターVer.2！地域の防犯意識を低下させない！長く使えるものに

掲示されているのは、令和3年7月に自治会が作成し、自治会加入世帯や地域の事業者へ配布したオリジナルの防犯ポスターです。

7年前に防犯ポスターを作成し、既に地域に配布をしていましたが、コロナ禍で自治会活動が制限される中、「こんな時だからこそ何か自治会でできないか。」と考え、改めて地域住民に防犯について意識してもらおうと、新しい防犯ポスターを作成しました。

今回作成したポスターは素材やデザインにこだわり、素材は雨風で痛むことがないように特殊加工したプラスチック素材を使用しています。

1つ1つのポスターには番号が振ってあり、自治会で配布先を管理できるようになっているので、もしポスターが外れていても元の持ち主まで届けることができます。茨木警察署の電話番号が大きく表示されている点もこのポスターの特徴です。

茨木市在住のデザイナーさんのイラストで、可愛らしく親しみやすいデザインへ♪



令和3年度に作成した防犯ポスター

■防犯ポスターに込められた、地域の願いとは？

そもそも、7年前に防犯ポスターを作成したのは、当時の自治会長の自宅が空き巣被害にあったことがきっかけでした。この事件を受けて、「日頃から地域で防犯について考える必要がある。」と感じた自治会長が役員と相談し、防犯ポスターを作成することになりました。



植木や花壇に設置されている防犯ポスター

POINT

防犯ポスターを作成したのは、2つの思いがあります。

- ① 普段なかなか防犯について考える機会がない方も、ポスターを目にして、防犯について考えるきっかけにつながる。
- ② 「防犯意識が高い地域」というアピールにより、空き巣などの発生の抑制につながる。

空き巣に入ろうとした人がいた時に、このポスターを見て思いとどまってほしい！

■事業者も含めて、地域でポスター掲示 ～もう空き巣は発生させない～

自治会が作成した防犯ポスターは、自治会の区長を通して各世帯に配布をし、掲示を呼びかけています。その他にも、地域内で掲示してもらうために、町内の集合住宅や子どもや親子が多く集まる中村町公園などにも掲示されています。また、会長や役員がポスターを持参して協力を依頼した結果、町内の事業者にも掲示してもらうなど、町内で幅広く啓発活動ができています。

防犯ポスターの掲載場所

- 自治会加入世帯
 - ・自宅の花壇や植木、玄関など目のつくところに掲示
- 集合住宅など
 - ・オーナーに配布し、集合住宅の共有スペースなどに掲示
- 町内の事業者
 - ・事業所や郵便局などの室外に掲示

■地域から市内全域に「防犯意識」を広げていきたい！

令和3年7月に自治会員などに700枚ほどのポスターを配布し、配布後2ヶ月が経過した9月の段階では、配った世帯の1割程度が新しいポスターを掲示してくれています。

中島会長は、「今後、多くの世帯にポスターを掲示してもらえるように、自治会で啓発文書を作成して配布するなど取り組んでいきたい。」、また、続けて「新しい防犯ポスターの掲示後、地域での犯罪件数がどのように変化したのか分析し、今後の取組みに活用していきたい。」と、話してくれました。

中村町自治会では、この取組みを他の自治会にも広げてもらいたいと考えており、既に中津校区自治会連合会においても防犯ポスターの事例を共有しています。

「中村町自治会の取組みを見て、防犯ポスターを作成したい自治会があれば、喜んで協力させていただきます。」と、ポスターの作成に携わった自治会役員の仲村さんは話していました。

この記事を読んで、取り組んでみたいと思った自治会の方は、市民協働推進課までご連絡ください！

■取材を受けた地域の方から一言

中村町自治会 中島会長

防犯については、地域でやれることと個人でやれることに分かれます。今回の防犯ポスター作成などは地域で出来ますが、最後は個人がいかに防犯意識を向上させ、気を付けるかが大切です。地域の皆さんには、このポスターを見かけるたびに、防犯について今一度考えてもらえれば幸いです。

■取材をした学生から一言

追手門学院大学地域創造学部 新本さん

防犯意識のある自治会は他にもあるかもしれませんが、中村町のように防犯カードを作成するなど、住民を巻き込んで活動しているのは珍しいのではないかと思います。

立命館大学総合心理学部 金子さん

防犯ポスターを作成するにもたくさんの工夫が凝らされていて感心しました。行事などについても、毎年決められたものを行うのではなく、毎年よりよい行事にするために考えられており、伝統を維持しつつも、新しいことにチャレンジできる自治会であるのが中村町自治会の強みだと思いました。

追手門学院大学地域創造学部 橋田さん

イラストレーターにデザインを依頼し、素材までも視認性や耐久性のあるものを使ってポスターを作成されていたため、防犯活動としては大いに効果があると思いました。また、中村町自治会は地域全体で取組みを行うことを大事にしているため、その意識が昔からの伝統をつないでいるのかなと思いました。



取材後の集合写真

安威北部自治会

黄色いタオルを用いた安否確認訓練と 独自性溢れる防災活動

～「全世帯」参加の防災まちづくり～

平成30年6月18日に大阪府北部を震源として発生した「大阪北部地震」。茨木市では、最大震度6弱を観測し、安威北部自治会のある安威地区でも大きな被害が出ました。安威北部自治会ではこの経験を踏まえ、いざという時に備えて、黄色いタオルを用いた安否確認訓練と、一時(いつとき)避難場所を決めての訓練を行っています。

■みんなの安否を確認したい！黄色のタオルは「無事」のサイン

同じものを使うことで統一感があってわかりやすい！



安否確認で使用する黄色いタオル

黄色いタオルを用いた安否確認とは、発災時にその家にいる人が全員無事であれば、黄色いタオルを道路から見えるところに掲示し、近隣の方に無事を知らせるという取り組みです。

黄色のタオルを「無事である」という目印にすることで、安否確認のスピードがアップするとともに、土砂災害や洪水被害が予想される際には、避難誘導の目印にもなります。

訓練で使用する黄色のタオルは、家にあるものを使用するのではなく、自治会で購入して各世帯に配布しています。「自治会で準備して配布することで、訓練時にはこのタオルを使用するのだという訓練参加の意識が生じる。」と、自治会役員の方々は話します。

このような工夫も功を奏し、令和元年6月に実施した安否確認訓練には、地区の9割近くの世帯が参加しました。

■「全世帯参加」での避難訓練！～災害時の地域での迅速な対応に向けて～

安威北部自治会では、2か所を地域の一時避難場所としており、令和2年1月に実施した一時避難場所に集まる避難訓練も、「全世帯」に参加を呼びかけ、地区の8割の世帯が参加しました。

安否確認を行い、災害用品を配布しました。



一時避難場所での避難訓練の様子

POINT

自治会の役員だけで実施するのではなく、全世帯に参加してもらうことで、災害を他人事ではなく、自分にとって身近なこと意識してもらいたいという思いから、なるべく全世帯に参加してもらえるように工夫しています。

具体的には、自治会として普段から地域の方との関わりを大切にしているほか、訓練の日程が近づけば、地域の中で「今度の訓練よろしく」と、声かけなどを行っています。

■災害時に対応できるように、自治会として準備する防災グッズ

自治会では、災害時に困るのは、トイレ事情だと考えて段ボールの簡易トイレと凝固剤のサンプルを取り寄せ、試行してみました。今後、簡易トイレと凝固剤を購入する予定で、自治会で倉庫に保管し、災害時に使用できるように備えたいと考えています。

また、「災害時のトイレ事情」をテーマに、トイレの凝固剤の使用訓練なども実施していく予定です。



段ボール製簡易トイレの紹介

実際に使ってみたら、段ボールの簡易トイレは、なかなかの優れもの！

■災害を自分事にしていく！更なる防災意識の向上に向けて、やりたいことって？

防災訓練を行っていても、実際に災害が起き、混乱した状況の中でどこまで訓練通りの行動がとれるかはわかりません。例えば、災害時に黄色いタオルを見える場所に掲示してもらうためには、「無事ならばタオルを出してください。」と、伝えて回る存在が必要になってくるかもしれません。

いざという時に適切な行動をとるために、「普段からの防災意識が重要で、災害時、瞬時にとるべき行動を考え、行動に移せる人を増やし、その影響の輪を広げていきたい。」と、考えています。

今後、そのような人材を地域の中で増やしていくために、自治会から防災に関する情報を積極的に発信し、地域の方の目に触れる機会を増やすことが必要だと考えています。

また、防災訓練についても、他市の事例を参考にしながら、防災意識の向上を図る様々な訓練を続けていく予定です。

自治会役員は、阪神淡路大震災で被災した地域での取組みについて、直接現地で話を聞き、安威北部自治会では何が出来るかを考えて取組みを行ってきました。地域内には安威川もあるので「次は、浸水被害にあった地域の防災対策について、直接話を聞いて今後の対策を考えていきたい。」と、語ってくれました。

防災に関する主な取組み内容

- 安否確認訓練
 - ・黄色いタオルを用いた安否確認（9割近い世帯が参加）
- 一時避難場所での避難訓練
 - ・全世帯に参加を呼びかけ、災害用品を配布（8割の世帯が参加）
- 防災グッズの備蓄
 - ・段ボールの簡易トイレと凝固剤を購入し自治会で保管予定

■取材を受けた地域の方から一言

安威北部自治会 会長

今回の取材に当たり、過去の防災訓練を再確認する良い機会となりました。頻発する災害に対して被害を最小限に抑えるためには、普段から想定外の災害がいつ発生するかわからないという前提で備える必要があります。これからも地域の防災意識向上につながる、簡単でわかりやすい訓練を企画したいと考えています。

■取材をした学生から一言

立命館大学総合心理学部 影山さん

黄色のタオルによる安否確認や一時避難場所、さらに簡易トイレや凝固剤など、災害時のことを真剣に考え、防災活動に取り組んでいることに感銘を受けました。さらに、防災訓練の住民の参加率が非常に高いことに驚きました。

自治会役員の方々の行動力と引率力、そして積極的に地域に関わる姿勢があるからこそ、地域の方は親しみをもち、協力するのだと感じました。



取材後の集合写真

沢池地区・西地区自治会連合会

地域を守る安心パトロール隊の取組み

～自分たちの手で、美しく安心なまちをつくる！～

春日丘地区(沢池小学校区と西小学校区を併せた総称)は、北は茨木カンツリー倶楽部、南は万博記念公園に挟まれた閑静な住宅地域です。そんな春日丘地区では、毎月第二土曜日、黄色いベストを着用した「春日丘地区安心パトロール隊(以下AP隊)」の皆さんが、地域の見回り活動を行っています。

■空巣対策から始まった「安心パトロール隊」

AP隊発足のきっかけは約20年前、春日丘地区において2ヶ月で11件もの空巣が発生したことでした。この問題を自分達の手で解決しようと、地域の自治会が集まり話し合った結果、平成14年に春日丘地区安心パトロール隊が発足しました。現在は、防犯協会沢池支部・西支部のメンバーが中心となり、自治会連合会役員、自治会長や地域のボランティアなど、総勢120名で活動しています。

AP隊の活動は、①毎月第二土曜日に実施するパトロールと、②朝昼2回、毎月20回ほど実施している「青色防犯パトロールカー」での巡回の2つです。第二土曜日のパトロールは、春日丘八幡宮での1時間程度のミーティングから始まり、その後は班に分かれて地区をパトロールします。

AP隊の活動を始めた翌年から、空巣の件数は大きく減り、前年は2か月で11件だったのが、活動を始めた翌年からは年間2、3件になり、地域の空巣やトラブルはほとんどなくなりました。

- 毎月第二土曜に実施するパトロール
 - ・参加するのは AP 隊メンバー約60名
 - ・6班に分かれて、地域内を徒歩でパトロール
- 青色防犯パトロールカーでの巡回
 - ・朝は1時間、防犯について呼びかける音声を流して地域を巡回
 - ・昼は2時間、子どもの下校時間に合わせて、子どもの見守り

防犯に関する AP隊の 活動内容



子どもの登下校の見守り

■パトロールカーの導入で機動力 UP↑

活動を始めた当初は、第二土曜日のパトロールのみ行っていましたが、他の地域で発生した児童殺傷事件や、登下校中の交通事故などをきっかけに、小学生の登下校の見守りを重点的に行う必要があると感じ、平日の見回りを実施するようになりました。

平日の見守りをするにあたって、徒歩だけでは機動力が足りないと感じたことから、平成17年に沢池、西、両地区自治会連合会で青色防犯パトロールカーを購入しました。



青色防犯パトロールカー

■地域住民の美化意識が向上！そして空き巣もポイ捨てもなくなった！

POINT

AP隊のパトロールで特徴的なのは、パトロールと併せて清掃も行っている点です。当初は、パトロールのみ行っていましたが、パトロールをする中でゴミが多く落ちていることに気づき、清掃も行うようになりました。パトロールと併せて清掃を始めてからは、その様子を見た地域住民の美化意識も高まっており、地域内のポイ捨ても20年前と比較すると大幅に減少しています。

今でも「綺麗なまちでは犯罪も起こりにくい」という思いで、清掃活動を続けています。

■高齢化の中でも工夫すれば活動を継続できる！

AP隊では現在、構成メンバーの高齢化やパトロールカーの運転手不足が課題となっています。今後は、現在立候補制で担当しているパトロールカーの運転手の役割を当番制に変更するなど、活動を継続できる道を探りながら、活動を続けていく予定です。

AP隊の中心メンバーである山口会長は、「パトロールを始めた当初に比べて、地域での犯罪件数は着実に減っており、地域内が大変綺麗になった。これはパトロールの成果だと思う。だからこそ、この地域に人が住む限り、内容を充実させて活動を続けていきたい。」と、今後の活動について力強く話しておられました。



文部科学大臣からの表彰状

平成20年には全国防犯協会連合会から防犯功労団体表彰を受け、同年に文部科学大臣からも表彰されるなど、市内外で活動が評価されています！

■取材を受けた地域の方から一言 沢池地区自治会連合会 山口会長

今回、次世代を担う若い人から取材を受けて、大変楽しく嬉しく思っております。地域の人達が、安心して暮らせる「まちづくり」に力を合わせて取り組んでくださることを誇りに思い、「この春日丘に住んでいてよかったな」といつも感謝しております。

一家の和は家族みんなで守ります。その集合体が地域となります。その地域の和は地域の人達で守らなければなりません。そうしたことから災害時の助け合い、まつりごとへの協力、日常生活の譲り合いといった、大切な人間愛が生まれてくるものと信じております。これからも地道に細く長く活動を続けたいと思っております。

■取材をした学生から一言

立命館大学総合心理学部 唐津さん

地域に対する熱い思いと決意が伝わりました。参加者が少なく、人数減少が課題であるという点は現代のあるあるで、この地域に限らない問題であると感じました。

立命館大学総合心理学部 小杉さん

防犯を警察に任せるのではなく、自分たちで地域の安全を守ろうと考えたところに地域への愛を感じました。自分の住む町はかなりゴミが多く汚いですが、町を綺麗にするために誰かが何かしてくれるのを待つのではなく、自分から動いていこうと思いました。



取材後の集合写真

玉島地区連合自治会

玉島地域に特化した防災情報を発信！ ハザードマップ概要版の作成

～地域の安全と幸せのために～

茨木市では、令和3年6月にハザードマップが改訂されました。玉島地区連合自治会では、地域の防災意識の向上に向けて、改訂されたハザードマップを参考に、玉島地区に特化したハザードマップの概要版を作成しました。

■防災意識を持ってほしい！地域に特化した、ハザードマップを作成！



玉島地区内には安威川が流れており、大雨や台風が発生した際には、安威川の氾濫を想定して行動する必要があります。

玉島地区連合自治会では、かねてより地域住民に「玉島は安威川が近いので、大雨や台風の時には、安威川のことを考えて行動しないとイケない。」ということを目頃から意識してほしいと考えていました。

そこで、地域住民の防災意識を高めるために、令和3年6月に改訂された茨木市のハザードマップの中から、玉島地区に関連する情報を抽出したハザードマップの概要版を作成することとしました。

特に、安威川に関する情報を中心に盛り込み、地域の人に重要なポイントがわかるようにしています。

作成したハザードマップの概要版

■まずは、地域の情報を知ることが大事！～啓発活動で、住民にPR～



ハザードマップ
啓発用ポスター

玉島地区には、約4,100帯が暮らしており、自治会に加入している2,000世帯には自治会を通して、作成したハザードマップの概要版を配布しました。また、玉島小学校に700部、玉島公民館に800部の概要版を設置し、より多くの方の手元に資料が届くよう工夫しました。

さらに、ハザードマップ概要版の作成と併せて、ハザードマップが改訂されたことを周知するための啓発用ポスターも100部作成し、自治会の掲示板や地域内の学校に掲示して、啓発活動を行いました。

玉島地区に特化したハザードマップの概要版作成→ハザードマップの啓発ポスター作成→ハザードマップ説明会への参加→連合自治会主催のハザードマップ出前講座の実施

防災に関する主な取り組み内容と活動の経緯

近所で買い物がしたい！ 「移動スーパー」の誘致成功

～地域の交流機会の創出へ～

豊川地区は集落が点在しており、地区の真ん中を走る171号線の周辺にはコンビニや飲食店が多数ありますが、地区内にスーパーはありません。高齢者が気軽に買い物できる環境の整備が地区の長年の課題です。この課題の解決に向けて、数年前から、豊川地区まちづくり協議会と豊川地区福祉委員会が中心となって、「移動スーパー」の取組みを進めています。

■住民ニーズに対応！豊川の豊川による豊川のための「移動スーパー」誘致へ



移動スーパー「とくし丸」

現在は清水から宿久庄一丁目
に場所を移しています。

地区の長年の課題を解決するため、福祉委員会が中心となって買い物ニーズに関するアンケート調査の準備を進めていた令和元年10月頃、移動スーパー事業を展開する「株式会社とくし丸」より、豊川地区での移動販売の実施について打診がありました。

令和元年11月から3か月間、地区の2か所で試行的に移動販売を実施し、その後令和2年2月から、豊川いのち・愛・ゆめセンターと清水で毎週木曜日、週に1回の移動販売が正式にスタートしました。

愛センターでは当初、センター前の道路で実施していましたが、車通りが多く危険であることから、市と手続きを行った結果、現在は愛センターの駐車場で移動販売を実施しています。

■移動スーパー開店！「あら、こんにちは、久しぶりね。」～住民の交流の場へ～

毎週木曜日、20～30人ほどの地域住民が移動スーパーへ買い物にやってきます。移動販売車には、お肉に野菜、惣菜などの食品をはじめ、ティッシュ等の日用品など、スーパーで購入できる300品目ほどの商品が揃っており、住民は歩いて行ける距離で気軽に買い物を楽しむことができます。

POINT

日頃、買い物に行けずにいた高齢の方達が、移動スーパーで久しぶりに再会し、互いの近況を伝え合うなど、移動販売車をきっかけとした交流が生まれ、高齢者の「集いの場」にもなっています。

福祉委員会の橋本会長は、移動スーパーの取組みについて「おすすめポイントは、『出会い』です。移動スーパーを通じて、人と人が自然と出会い、「今日は何持ってきたん？」「へーこんなんあるやん！」という住民とお店の人との会話や、「久しぶり！元気してた？」「こんなんあるから顔あわせられるなー！」といった住民同士のやり取りが自然と湧き上がるんです。」と、話します。

また、利用者に対してアンケート調査を実施し、利用者のニーズや課題を把握し、とくし丸やコミュニティソーシャルワーカーとも結果を共有しながら、移動スーパーの取組みを継続しています。

■今後も続けていきたい！～移動スーパーの継続に向けて～

移動スーパーを定期的にご利用し、そこでの交流を楽しみにしている住民がいる一方、利用者数は徐々に減少しており、取組みを継続するためには、利用者数を増加させる必要があります。

利用者数が減少傾向にある理由としては、移動スーパーが来る時間帯が夕方の遅い時間で、地域住民にとって利用しやすい時間帯でないことや、地区内2か所での実施のため、移動スーパーを利用できる住民が限定されていることなどが考えられており、今後は、利用者数の増加に向けて、改めて利用者アンケートを実施し、時間帯の見直しや、実施場所の変更をとくし丸と協議していく予定です。

また、移動販売の実施場所周辺の自治会に、とくし丸の利用を呼び掛ける文書を配布するなどして、啓発も行っていく予定です。

豊川地区まちづくり協議会の中村会長は、「移動スーパーが来てくれるのは、便利であることは間違いないので、今後も取組みを継続していけるように利用者数を増やしていきたい。利用者が増加することで、とくし丸が豊川地区の居場所となっていきたい。」と、話されていました。

また、「豊川地区には、多くの高齢者がいます。将来的には、地域で車を購入して、タクシーのような高齢者の移動手段を作っていきたい。」と、高齢者や地域の方が快適に住むことができるような取組みも考えていました。



移動スーパーの周りで話をする利用者

毎週木曜日に「とくし丸」がやってくる（令和3年現在の実施日時）

①豊川いのち・愛・ゆめセンター PM3:30～4:00 ②宿久庄一丁目 PM5:00～5:30

■取材を受けた地域の方から一言

豊川地区まちづくり協議会 中村会長

学生さんが熱心に地域課題の取材をされている姿に感心しました。これからの地域活動で若い力を発揮されることを期待しています。

豊川地区福祉委員会 橋本委員長

話をする中で、新たな気づきもあり、私自身参考になる事も多くありました。また、学生の方の、地域活動に関わってほしいという意欲を感じ取ることが出来ました。

■取材をした学生から一言

追手門学院大学地域創造学部 大野さん

豊川の現状や課題、多くの取組み内容を知ることが出来ました。地域の実情をしっかりと把握されているからこそ浮き彫りになる課題や、課題解決のために様々な活動を行っていると分かりました。事例集を通して、豊川地区以外の方にも見てもらうことで、ボランティアの参加など何かしら影響を与えられたら嬉しいです。

追手門学院大学地域創造学部 菅さん

自治会の話聞いて、様々な課題を知り地域のことを学べる機会になりました。ボランティアとして街の課題の解決に参加したいと、話を聞きそう思いました。

立命館大学総合心理学部 神田さん

「このまちをよくしたい」という気持ちが伝わってきて素敵だと思いました。「活動すること」に重きを置くのではなく、「豊川に必要なこと」は何かという視点を大切にしていることが印象に残りました。また、組織が横断的に話し合う場が頻りに設けられていることが、活発かつ需要のある地域活動につながっていると感じました。若者世代の力を必要としていることから、学生として地域に関わる意義を見出せる気がしました。

立命館大学総合心理学部 ヤンさん

豊川地区の集落状態（集まりにくさ）を十分把握されており、だからこそ地域住民の居場所の提供に取り組んでいることが分かりました。今回の事例集を通して、豊川地区まちづくり協議会さんの語りが多い地域の方に伝わり、移動スーパーやボランティア参加にもいい反響がみられるといいなと感じました。



取材後の集合写真

郡五丁目西自治会

子どもと大人で楽しむ 「犬のフン撲滅大作戦」

～ “みんな” でめざそう綺麗なまち～

郡五丁目は171号線沿いに位置する閑静な住宅街で、郡小学校に通う子どもが多く暮らしている地域です。地元自治会の郡五丁目西自治会では、毎週日曜日に地域の環境美化活動の一環として、「犬のフン撲滅大作戦」を実施しています。

■住民同士の会話で認識した「犬のフン問題」～解決に向けてすぐに行動～

郡五丁目西自治会では、平成27年1月から毎週日曜日に「犬のフン撲滅大作戦」と称して、地域の大人と子ども10人程で地域の清掃活動を行っています。

POINT

この取組みが始まったきっかけは、自治会の新年会の席で出た、「五丁目は、レンガ色の歩道で綺麗なのに、犬のフンが落ちているのが目立つね。」といった些細な会話でした。

この新年会での会話をきっかけに、自治会はすぐに清掃活動をスタートさせました。清掃を開始した当初は、大人だけで活動を行っていましたが、地区全体で活動に取り組んでいくために、活動に参加している人たちの子どもや、その子どもの友達にも声をかけて、今では大人と子どもと一緒に清掃を行っています。

また、地域住民や地域に訪れる人に、清掃をしていることを知ってもらい、「ゴミを捨てない」意識を醸成するために、清掃をする際には、人目につきやすい緑色の美化活動ベスト(茨木市が貸与しているもの)を着用しています。

現在、「犬のフン撲滅大作戦」は、毎週日曜日、夏場は朝7～8時、冬場は朝8～9時に実施しています。毎月第1日曜日の朝8～9時までは、「犬のフン撲滅大作戦」のメンバー以外も集まって、地域内の公園の一斉清掃を行っています。



「犬のフン撲滅大作戦」の様子

■活動の成果！犬のフンは撲滅！～しかし、ごみのポイ捨てはなくなる～

「犬のフン撲滅大作戦」を開始してから6年が経ち、「犬のフン」は今ではほとんど見かけなくなりました。しかし、今でもタバコの吸い殻や空き缶、ペットボトルなどのポイ捨ては無くなっていません。

小学生の参加者は、「なぜポイ捨てをするのかわからない。清掃活動をしている人は絶対にポイ捨てをしない。みんなが清掃活動をすれば、ごみをポイ捨てする人は減ると思う。」と、話してくれました。

また、中学生の参加者は、「ポイ捨てをする人は、清掃活動をしたことがない人で、悪いことをしている実感が無いと思う。ポイ捨てをする人が、どうすれば減るのかわからないけど、私たちが清掃をしている姿を見て、少しでもポイ捨てをする人が減ってほしい。」と、話してくれました。

■まちを綺麗にしたい！～活動の継続と啓発が大切～

現在は、小学生と中学生合わせて10名ほどの子ども達が活動に参加しています。しかし、中学生になると部活動が始まり、活動への参加は難しくなります。

中学生が活動から卒業しても、体制を維持できるように、自治会では美化活動の様子をまとめた文書を作成して回覧したり、自治会の掲示板に掲載するなどして、地域住民に関心を持ってもらえるように積極的にPRを行っています。

今後の活動について、「地区内の子どもの数が減っており、自治会の加入率も低下しているため、今のまま活動を続けるのは難しいかもしれない。今後は、高校生や大学生も活動に呼び込んで、何とか継続していきたい。」と、更屋会長は話します。

また、口石副会長は「日頃あまり話すことのない子ども達と一緒に清掃活動することで、大人も元気をもらっている。子ども達と活動する楽しさを発信して、今後はもっと大人の参加者を増やしていきたい。」と、話してくれました。

平成27年から始まった活動は現在6年目。この活動を地域に根付かせるために、まずは10年を目標に、今後も活動を続けていきます。



自治会で作成した清掃活動のチラシ

- 犬のフン撲滅大作戦(毎週日曜日)
 - ・夏期:朝7時～8時 冬期:朝8時～9時
- 地区内の公園一斉清掃(毎月第1日曜日)
 - ・撲滅大作戦のメンバー以外も集まって、取り組んでいる。

環境美化に関する主な取り組み内容

清掃に参加している子ども達も来てくれました！

■取材を受けた地域の方から一言

郡五丁目西自治会 更屋会長

「好きです きれいな街 いばらき」、緑のベストがとても似合う子ども達の姿は、犬のフン撲滅パトロール隊の主役となっています。開始から6年が経過した今日、散乱していた犬のフンが目立たなくなり、活動の成果を実感する昨今、この終わりの無い地域の美化活動に、いつも笑顔で参加する子ども達を影で支えてくれる保護者に感謝します。

■取材をした学生から一言

立命館大学総合心理学部 影山さん

子どもと一緒に美化活動を行うということは、子ども、大人、地域の3方面にメリットがあると感じました。子どもは、朝早起きをして美化活動をして回ることで規則正しい生活を送ることが出来ます。大人は、子ども達から元気をもらい、活動に取り組むことができます。地域にとっては、街が綺麗になり住みやすくなります。街が綺麗になれば、犯罪が減るということは、心理学的にも言われていることで、活動を継続し、美化活動に取り組んでいることを発信し続けることで、より良い街になると感じました。

立命館大学総合心理学部 土井さん

基本的にこういった自治活動は子どもが関わる領域にはなりづらいと思っていました。しかしながら、ここでは地域交流も兼ねた活動が行われているのが印象的でした。



取材後の集合写真

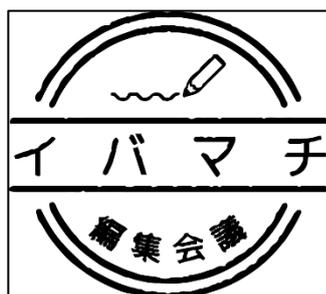
イバマチ編集会議の取組み経過

～地域と学生が知って、学んで、つながる事例集の作成に向けて～

市内の大学に通う学生で構成した「イバマチ編集会議」のメンバーで、地域課題の解決に向けて、創意工夫した取組みを行う市内16組織の取材を行い、事例集を作成しました。

■取組みの経過

時期	項目	主な活動内容
2021年 6月～7月	メンバーの募集	●募集チラシの作成 ・茨木市が大学包括連携協定を締結している大学を対象に、募集チラシを配布し、メンバーを募集した。
2021年 7月	第1回イバマチ編集会議	●応募者を対象としたイバマチ編集会議の説明会 ・イバマチ編集会議の活動内容の説明 ・取材方法や接遇についての研修
2021年 8月～10月	地域への取材	●創意工夫した取組みを行う16組織を取材 ・1名～3名程度の学生取材班と事務局で、取材を実施。 ・学生は、インタビュアーと記録係の役割を担った。 ・取材終了後は、オンラインミーティングを行うなど、取材内容を取材班で共有した後、学生自身で事例集の原稿を作成した。
2021年 11月	第2回イバマチ編集会議	●進捗状況の確認、事例集の紙面について意見交換 ・原稿の内容について、WS形式で意見交換を行った。 ・紙面の構成やデザインについて、WS形式で意見交換を行った。
2022年 1月	事例集、報告会の名称を募集	●事例集、報告会の名称を募集 ・事例集、報告会の名称を学生から募集した。 ・学生の意見を踏まえ、事例集は「住みたい・住み続けたいまちづくり大百科」、報告会は「いばまちサミット～楽しい、住みたい、私のまちでもやってみよう～」に決定した。
2022年 2月	第3回イバマチ編集会議	●報告会に向けての会議 ・3月の報告会に向け、発表内容の確認、発表練習を行った。
2022年 3月	報告会	●報告会での事例紹介 ・報告会において、学生から地域の方々に、取材した地域の事例について報告を行った。



イバマチ編集会議ロゴマーク



イバマチ編集会議 メンバー名刺

イバマチ編集会議の活動写真

イバマチ編集会議

第1回(追手門学院大学と立命館大学で開催)



第2回(立命館大学で開催)



第3回(茨木市立男女共生センター ローズWAMで開催)



取材の様子



イバマチ編集会議に参加して、私が感じたこと (参加学生コメント集)

「イバマチ編集会議」のメンバーが、今回の活動に参加して感じたことを書いてくれました。

防犯意識が高まった取材	地域を良くしたいという強い思い
<p>今まで防犯について考えたりすることはあまりありませんでしたが、中村町自治会の取材をさせていただき、自治会の中で防犯意識を高め行動することの重要性を学びました。</p> <p>防犯カードの事例から、自分には何ができるのかを考えて地域に呼びかけることや、行動に移す重要性を再確認した良い機会になりました。</p> <p>追手門学院大学地域創造学部／新本 菜央</p>	<p>今まで、地域ではどのような活動が行われているのかを知らなかったのですが、今回の取材を通して地域では様々な活動が行われており、地域の人々のために何をすべきか考えてくれている人々が存在する、ということを知ることが出来ました。</p> <p>これからは自分自身、もっと地域活動に参加したいと思います。</p> <p>追手門学院大学地域創造学部／大野 優</p>
地域活動に隠された思いを知った取材体験	住民の方々のリアルな声を聞く体験
<p>私は3つの自治会を訪問し、それぞれの自治会が「より良い地域をつくるためにはどうしたらよいか」ということを、常に考えて取組みを行っていることを知りました。それぞれ様々な個性があり、とても興味深かったです。</p> <p>私自身が住む地域では、どのような考え方のもと地域活動が行われているのか知りたいと思いました。</p> <p>立命館大学総合心理学部／影山 ひかり</p>	<p>私は茨木市で団体活動などの課外活動をしています。しかし、町のほんの一部の人としか関わりを持っていません。そのため、イバマチ編集会議で多種多様な町の人々の思いや意見を聞いたことは貴重な体験であったと感じています。</p> <p>データや社会潮流を見てもわからないことばかりで、住民の方の声がいかにか貴重かを思い知らされました。</p> <p>立命館大学政策科学部／片桐 美海</p>
地域一丸で取り組む姿勢	イバマチ編集会議に参加して
<p>このイバマチ編集会議を通して、茨木市の行ったことがない地域に行かせて頂き、新たな発見と気づきがありました。</p> <p>それぞれの自治会が、コロナ禍などで問題を抱えながらも積極的に活動していらっしゃる姿に感動致しました。地域全体で支え合いながら、これからも活動を続けていってほしいと心から思います。</p> <p>立命館大学総合心理学部／加藤 愛華</p>	<p>実際に自治会の方にお話を伺ったり、一緒に地域を歩き説明を聞いたりすることで、皆さんの地域愛をととても感じました。同時に、私自身も茨木市に対しての印象が変わり、自分にとって特別な街になりました。</p> <p>この様な貴重な経験が出来て良かったです。今回の取組みが茨木市の活性化に少しでもつながれば、とても嬉しく思います。</p> <p>立命館大学総合心理学部／金子 葉奈</p>
プロジェクトを通して芽生えた茨木愛	地域を思う気持ちが地域を創る
<p>授業を通しての参加という形ではありますが、このイバマチ編集会議に参加させていただき、とても光栄に思います。実際に会う形で取材が行えたことはとても良い経験となりました。</p> <p>しかし、あまり時間をかけて関われなかったことが心残りです。これから茨木市に通う中で、形は違えど地域に関わり、貢献出来たらと思います。</p> <p>立命館大学総合心理学部／唐津 碧</p>	<p>多数の自治会の方々から活動についてお伺いする中で、全てに共通して「よりよい地域を創る」という思いが中心にあることを学びました。</p> <p>また、定期的に行われたイバマチ会議を通して、学年や大学を超えて意見交換ができ、地域コミュニティの活性化について深く考える貴重な機会を得ることが出来ました。</p> <p>立命館大学総合心理学部／神田 七海</p>

<p>街づくりを考えるきっかけ</p>	<p>自治活動への印象と参加の意識が新たに</p>
<p>様々な活動を取材していく中で、自分の知らないところで多くの方が茨木を支えていることに気がつきました。</p> <p>私たちが茨木で生活できているのは、自治会の皆様が陰ながら努力なさっているからだということに自覚するとともに、自分にもできることはないかを考えていこうと思います。</p> <p>立命館大学総合心理学部／小杉 粹平</p>	<p>自治活動はよく知らずに見ると地味に思うこともあるけれど、活動を形作ってきた地域の歴史や想いを学べば、輝く個性が見えました。</p> <p>取材した自治会で温め中のアイデアもあり、茨木市は今後より活気ある場所になると感じました。自分も地縁を大切にして、自治活動の魅力をあまく見ている友達がいたら、面白さを伝えたいです。</p> <p>立命館大学政策科学部／雑賀 亜以子</p>
<p>実際に見聞きしてわかること</p>	<p>現地で取材する大切さ</p>
<p>自治活動と一口に言っても、その地域ごとの様々な特性(それは祭りなどの文化であったり、その地に住んでいる人であったり)や、様々な活動の方向性を持って取り組んでいることが印象的でした。</p> <p>何気ない生活の裏にあるこういった努力や取り組みの数々が快適な生活の要ではないでしょうか。</p> <p>立命館大学総合心理学部／土井 歆慈</p>	<p>いくつかの自治会を取材して、どの自治会も課題を抱えていましたが、解決に向けた取り組みが行われていました。</p> <p>私は大学生になり、実際に地域に入って住民の方に取材を行うといった取り組みは今回が初めてでした。そのため、文面では感じる事ができなかった地域の雰囲気や、住民の方の人柄を肌で感じる事ができました。</p> <p>追手門学院大学地域創造学部／橋田 真南翔</p>
<p>まちの住人としてできること</p>	<p>想いを聞いて考えたこと</p>
<p>コロナ禍で活動が制限される中、自治会の役員の方が地域のためにできることを模索し、実行しておられる姿に感心しました。</p> <p>地域を元気づけたり地域の安全を守ったりするのに、自治会の活動は不可欠だと改めて思いました。今後、自分の住む地域の活動・イベントに、私も積極的に参加していこうと思いました。</p> <p>立命館大学総合心理学部／古田 篤基</p>	<p>実際に各地区の会長さんのお話を聞く中で、どんな想いで活動されているのか、また地域住民の方が住みやすい地区になってもらうためにどうすれば良いのか、日々考え、取り組まれていることを知れました。</p> <p>もっと自分の地域の活動にも目を向けてみようと思います。</p> <p>追手門学院大学地域創造学部／堀江 優菜</p>
<p>取材を終えて考えたこと</p>	<p>茨木市の新しい魅力を知れた取材体験</p>
<p>大学生活の中で地域と直接関わることをしてみたいと思って、イバマチ編集会議の参加を決めました。それぞれの自治会の方が地域のことを考えた取り組みをしていることを市民の方に知ってもらいたいなと思いました。</p> <p>また自治会の加入率低下の問題などについて、これからも考えていきたいと思いました。</p> <p>立命館大学政策科学部／山田 奈々恵</p>	<p>これまで自分が住んでいるエリア(茨木駅～茨木市駅)の情報しか知りませんでしたが、この取材活動を通して、茨木市にある他のエリアでどんな地域活動に取り組んでいるかを知ることができました。</p> <p>各々の自治会が取り組んでいる活動がさまざまであったので、該当エリアの地域活動にも参加してみようと思いました。</p> <p>立命館大学総合心理学部／YANG SOOIN</p>



地域課題の解決に向けた取組み事例集

住みたい・住み続けたい まちづくり大百科

令和4年(2022年)3月

編集：茨木市 市民文化部 市民協働推進課
〒567-8505 茨木市 駅前三丁目8番13号
TEL：072-622-8121(代表)
URL：<https://www.city.ibaraki.osaka.jp/>

次なる
茨木へ。



リサイクル適性 B

この印刷物は、板紙へ
リサイクルできます。